



# 羅針盤

2015年度 第21号  
都立豊多摩高等学校  
進路図書部

Geistesaristokrat

2016（平成28）年3月25日発行

2016年の大学入試が一段落ついた。よい報告が寄せられている。現役で旧帝大に合格した学友がいる。一浪で国立大学の医学部に合格した卒業生がいる。早慶上理も、GMARCHも、合格者が増加している。

いっぽうで、2年生が、指定校推薦の情報を聞きに進路室に来るようになった。その都度、進路図書部の教員は、間接的に再考を勧める。豊多摩で指定校推薦に応募するということは、自分の実力を低く見積もり、安売りすることになるからである。指定校の条件を満たすような学友なら、もう少しの努力によって、もっとも重い扉を開けられるはずだからである。

## 強気を育て、弱気をくじけっ！

68期のMは、3年生の秋、進路室に、S大学の指定校推薦の相談に来た。枠は空いていても、遅刻が多いので推薦できなかった。それまでふわふわしていたが、逃げ場のない状況に追い込まれた。塾には行ってなかった。ずっと、年が変わっても、いろんな先生のところ相談や質問に来ていた。結果は、R大学経済学部合格、W大学社会科学部補欠。「補欠が繰り上がらなかつたら、R大学に行きます」と話していた。それでも、上出来だと思っていた。卒業式の前日、興奮を抑えきれない面持ちで職員室に入ってきた。「W、合格しました、今日です」と言った。

そういうものである。

もちろん、推薦利用が正しい場合もある。一回勝負が極端に苦手な、実力を発揮できない人がいる。それを自覚し、入学当初から指定校をねらって努力を続けてきたのであれば、正しい作戦である。芸術やスポーツなどの特殊分野で、正真正銘第一志望の推薦を狙うのであれば、これも正しい選択である。

問題は、努力を惜しむケース。勉強が苦しくて弱気になって、早く楽になるために推薦入学を選ぶ場合である。優秀な生徒に来てもらいたい大学にしてみれば、思うつぼである。逆に、受験生にしてみれば、いつのまにか自分を安く売ることになってしまう。

人生の岐路に立ったとき、判断を誤らないためには、本質的な意味や原則的な考え方に立脚することである。

勉強の本来の目的は、知識や教養、思考力を身につけることである。大学合格ではない。とはいえ、志望大学を目標に、偏差値や合否判定と向き合えば、能力獲得の目安になる。不安や弱気と対峙し、自分を磨くための修養期間になる。推薦やAO入試に逃避すれば、その貴重な機会を失うことになる。Mは、たとえ結果が出ていなくても、数ヶ月の研鑽が彼の人生にプラスになるはずなのである。

自己を磨く時の原則は、頑張れば頑張ったぶんだけ力がつくということである。他者と比べるから、才能の優劣が存在する。同じ人間なら、練習したぶんだけ強くなり、勉強したぶんだけ賢くなる。練習も勉強も嘘をつかない。「努力すれば、成功は保証されないけれど、成長は保証される」（「羅針盤」第3号）。「最大限の努力が、最低限の努力として評価され」（同第11号）、その結果「なれるもんになる」のである（同第13号）。

3年生になって最初の模擬試験の結果に接すると、衝撃を受ける人がいる。最初に不安にかられる時である。2年生までと違って、分母の受験者に、先行している浪人生が加わるから、平均点が上がり、偏差値が低めに出るのである。この時点では、一度仕上げた浪人生の方が優位に立つ。が、伸びきった浪人生はやがて失速し、伸び代のある現役生が追撃することになる。

次に不安にかられるのは、夏休みから秋にかけてである。集中して勉強したはずなのに、点数や偏差値に結びつかない。そんな感覚に囚われる人がいる。が、勉強は蓄積だから、続けている限り、力が落ちることはない。とはいえ、成果は、順調な右肩上がりでは現れてくれない。階段状に現れる。伸び悩みの踊り場の

あとに、急激なブレイクスルーがやってくる。運動部の学友なら経験していよう。勉強も同じである。夏休みの努力が模擬試験に反映するのは10月以降である。その前に、弱気になってはいけない。

## 根拠のない自信

不安や弱気と向き合うとき、強い味方は「根拠のない自信」である。

茂木健一郎のことは「根拠なき自信をもて。それに見合う努力をせよ」を紹介したことがある（同第7号）。あれである。サッカーの本田圭祐も、一流選手には「根拠のある自信」と「根拠のない自信」が必要であるといい、「身内や自分ですら、驚くくらいの自信が僕にはある」（『東京新聞』2014年6月7日朝刊）と述べている。

もちろん、「それに見合う努力」をするに越したことはないが、仮に同じ努力量だったとしても、自信を持って取り組むばあいと自信を持てずにするばあいとは、成果に違いが出るはずである。そうであるならば、自信を持って立ち向かうほうがいいに決まっている。

脳科学者の池谷裕二が、「根拠のない」どころか、**過大な自己評価**についての研究を紹介している。

自己のレベルを正しく判断できない——このような手痛い傾向は、評価ミスである以上、一見不利にも思えます。ならば、なぜ進化で淘汰されなかったのでしょうか。エジンバラ大学のジョンソン博士らが興味深い仮説を提示しています。彼は電算シミュレーションを行い、**自己の能力を誤って高く評価する人は、競争においてしばしば有利に働き、結果として団体のなかで優位になっていくことを証明しました。戦わずして勝利はない。**向こう見ずであることは最初の一歩を踏み出すことに一役買うのでしょうか。

池谷裕二『脳には妙なクセがある』（扶桑社新書、2013）38頁

興味深く、具体的な検証過程を知りたい話だが、そこまで詳しく書いていない。

「根拠のない自信」で、一般受験に立ち向かってほしい。第一志望を譲ってはいけない。目標を下げることはいつでもできる。センターの自己採点を見てからでいい。受験科目の仕組みから、途中で目標を上げることはできない。志望校は高く持ってほしい。学力は、志望校に応じてつくものである。

国立を目指してほしい。国立の後期まで走り続ける覚悟をした者は、腹が据わるから、それ以前の結果も出すものである。私立3科目は、少ないぶん、僅かな失敗も許されない。国立は、科目が多いぶん、伸び代を多くもつうえ、多少の失敗も挽回できる。国立を目指した者は私立も突破する。

国立のメリットは、学費と少人数教育だが、そのことはあらゆる条件に波及してプラスに働く。

新聞のコラムから

【ひと】 不登校を克服し、海外公演を果たした太鼓奏者 **飯島 学** さん(31)

東日本大震災の犠牲者への思いを込めたレクイエム。うって変わって、バチの躍動が聴衆を釘付けに——。埼玉県を拠点とする太鼓集団「響（ひびき）」の一員としてこの夏、英国で開かれた世界最大級の芸術祭「エディンバラ・フェスティバル・フリンジ」の舞台に立った。定時制高校の部活動の延長として立ち上げてから8年。初の海外公演に導いた。

「お客さんに受け入れられて、楽しかった。これまでやってきたことは間違っていなかった」

小学校高学年から中学まで、不登校。担任に「あなたは普通じゃない」と言われ、ショックを受けた。周りからどう見られているのか気になり、家に引きこもった。

「自分を変えたい」と入学した埼玉県立浦和商业高校定時制の体育の授業で、太鼓に出会う。体を使い、自分をさらけ出す。演奏を通じて人とつながる面白さに気づき、太鼓部の活動にのめり込んだ。定時制は廃止されたが、仲間と活動を続け、2013年に「プロ宣言」。全国各地をツアーで巡る。「**自分の姿が、今苦しんでいる人に勇気を与えられたら**」

若者の居場所をつくろうと昨年、不登校の経験者らで埼玉県桶川市にカフェを開いた。子どもの不登校に悩む親には、こう声をかける。「あせらず待つてほしい。何かのきっかけができたときに、それをチャンスにすればいい」

（文・清宮、「朝日新聞」2015年11月17日（火）朝刊）